

学位請求論文審査報告書

氏名・（本籍地）	草木 美智子（東京都）
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第132号
学位授与の日付	令和3年3月15日
学位論文題目	栗木京子研究
論文審査委員	主査 梅澤 亜由美 副査 大場 朗 副査 小嶋 知善 副査 山本 章博

論文の内容の要旨（1200字以上）

草木美智子氏によって提出された課程博士請求論文『栗木京子研究』について、主査1名、副査3名による審査体制で審査を行った。その結果について、1、本論文の枚数と目次、2、本論文の概要、3、本論文の学術的価値と独創性、4、公開口述試問における質疑と審査結果という項目に分け、以下に記す。

1、本論文の枚数と目次

本論文は、40文字×40行の書式設定で214ページ、400字詰め原稿用紙換算で856枚に相当する。序章および結章を含む6章13節で構成されており、その目次は以下の通りである。

序章

第一章 栗木短歌の表現と技法

第一節 体言止めの表現効果—第五歌集『夏のうしろ』を中心に—

第二節 栗木短歌における「直喩表現」の基礎的研究—直喩表現とその効果—

第三節 俳句引用の意図

第二章 栗木歌集の構造と配列

第一節 歌集の巻頭・巻軸歌の構造とその意図（その一）

—第一歌集から第五歌集の分析を中心として—

第二節 歌集の巻頭・巻軸歌の構造とその意図（その二）

—第六歌集から第一〇歌集の分析を中心として—

第三章 家族詠の特質とそのゆくえ

第一節 社会詠と家族—「夫」と「子」の歌を中心として—

第二節 戦争詠と家族（その一）—「家族詠」を手がかりにして—

第三節 戦争詠と家族（その二）—作者の自身詠を中心として—

第四節 震災詠—第八歌集『水仙の章』にみる「喪失」と「祈り」—

第五節 「母の詠」—五島美代子との比較を通して—

第四章 社会詠の生成と展開

第一節 初期作品考—京都大学在学時の歌の原点とそのゆくえ—

第二節 「数字」表現の役割とその効果

第三節 詠歌「視点」の変化とその背景

結章

栗木京子年譜（作歌活動・著作・家庭内の出来事を中心に）

2、本論文の概要

本研究は、現代歌人である栗木京子のデビューから現在まで発表されている全10の歌集を分析の対象とし、歌集の構成やレトリックといった表現や技法、および、栗木短歌の特質である「社会詠」「家族詠」に注目し、その分析を行うことで歌人の全貌について明らかにすることを試みるものである。目次については前にあげた通りであるが、その内容について以下に示す。

第一章では、表現と技法について論じている。第一節では体言止めに注目し、その手法が栗木短歌における表現の可能性の拡大につながっていることを述べる。第二節では、「直喩表現」に注目、具体的には「ごとし」「やうなり」を抽出・分析することで、その用法が歴史的用法に基づくことを指摘する。第三節では、和歌の「本歌取り」からの展開として俳句の「引用」をとりあげ、歌意の重層化の手法について述べる。

第二章では、第1歌集『水惑星』から第10歌集『ランプの精』までの各歌集の巻頭歌・巻軸歌をとりあげ、歌集の全体を素描する。第一節では第1歌集から第5歌集までを、第二節では第6歌集から第10歌集までを対象とし、栗木の歌集が古典和歌の配列、構成の影響に拠っていることを指摘する。

第三章では、栗木の「家族詠」をとりあげ、家族を通して「戦争」、「東日本大震災」といった社会的事件を詠むという「家族詠」における社会的視点を指摘する。第一節ではもっとも多く詠まれている「子」「夫」の歌に注目し、栗木の「社会詠」は身近な家族を介して詠まれるというその特徴が示される。第二節では「祖父母」「父母」「伯父」「叔父」といった「戦争の実体験がある家族」を詠んだ歌に注目し、栗木の「戦争詠」もまた身近な存在に拠っており、栗木が「戦争」を詠むことの原点が示される。更に、第三節では「自身詠」に注目し、「戦争」を詠むことの葛藤についてが述べられている。第四節では「東日本大震災」、および「母の介護」を詠んだ歌に焦点を当て、「当事者性」「非当事者性」といった視点からの詠歌姿勢の変化を指摘する。第五節では「母の詠」という着眼点から五島美代子との比較を行い、栗木の「母の詠」とは「クロニクル(記録)」の意味を持ち、「社会詠」を詠む手法に重なることが指摘される。

第四章では、「社会詠」をとりあげその展開について論じている。第一節では、第1歌集に収められなかった歌に注目することで「社会詠」の萌芽はその初期からすでに表れていたことを指摘する。第二節では、数字を多用する手法からそのあり方を「クロニクル(記録)」と定義づけ、「事実を提示」し「時代を証言する」ことを目的としていることを指摘する。第三節では、栗木の「社会詠」の詠歌視点に着目し、その萌芽から現在までの展開について「傍観者」「当事者」「行動者」としての変化として跡付ける。

巻末には、叙述形式で作成された年譜が付され、詠歌の背景を知る補助の役割を果たしている。

3、本論文の学術的価値と獨創性

本論文の学術的な価値として、大きくは以下3点をあげることができる。

①現代を代表する歌人についての、初の本格的な研究であることがあげられる。先行研究である佐田公子『栗木京子の作品世界』(短歌新聞社)は2008年出版のものであるため、2010年以降に発表された第7歌集から現在までを含む全歌集を射程とした研究としては本論は初のものとなる。論文末には年譜も付され資料的な価値も兼ね備えており、特定の歌人を対象とした基盤的な研究として十分な学術的価値を備えている。

②本研究の手法的な面においては、一貫して全10の歌集から該当する歌が統計的に抽出され、抽出された歌に対する精緻な分析という方法が貫かれている。各歌に関する手堅い分析はもちろん、全10の歌集から対象となる歌を抽出してその割合を算出するなど統計的な手堅さも評価に値する。巻頭歌・巻軸歌に注目した歌集の構成に関する分析や俳句の引用など、現代歌人の研究でありながら古典和歌の研究手法などを取り入れている点も本論の特徴的な点であると言える。

③栗木短歌における「社会詠」の生成と展開について明らかにしたことがあげられる。その萌芽は初期の頃からすでに見られたものであること、詠歌視点は詠まれた時期によって変容があること、また栗木の「社会詠」は身近な家族を通して詠まれるのが特徴であること、などが指摘された。「社会詠」の存在がより明確になった第五集である『夏のうしろ』は英訳がなされ(Amelia fielden, Yuhki Aya, Ginninderra Press, 2005)、巧みな比喩を用いて国際紛争などの題材を歌とする点が、国際的にも高く評価されている。このように対外的にも評価が高まる歌人を研究の対象とし、その中でも注目されている「社会詠」の生成と展開についての跡付けを行ったこと、これらは本論の最大の学術的な価値であると言ってよい。

4、公開口述試問における質疑と審査結果

公開口述試問では、主査および副査から、大きくは以下3点について指摘がなされた。

①用語の定義に関して、いくつかの指摘がなされた。本論では短歌における「引用」、あるいは「社会詠」「戦争詠」といった定義を確認する必要がある用語が分析のポイントとなっている。草木氏の論においては、事典類をはじめとする一般的な理解については的確に示されている。一方で、本論での使用法がまったく同じと言ってよいのかなど、疑問が提示された。特に、短歌における「引用」は引用される素材などが現在も多岐に広がっており、明確な定義をしがたい状況にある。こういった場合においては、一般的な定義を示すとともに、本論における定義をもっと前面に出すことで、論がより明確になると利点もある。これについては、今後の研究において心がけるべき点であるという結論となった。

②本論では栗木の短歌に古典和歌からの影響を指摘しているが、古典和歌の語句が詠みこまれた歌の解釈にあたってもう少し精緻な分析ができる箇所があるという指摘がなされた。本論の学術的価値の一つとして、古典和歌の技法や表現の影響を指摘する点があり、いくつかの指摘については高い評価がなされていた。一方で、影響を指摘し得たことにとどまっている個所もあるとされ、今後、古典和歌をふまえた歌にあっては、その解釈の重層性をより意識した分析を心がけてほしいという注文がなされた。本論の学術的価値の一つであるゆえ、厳しい指摘となったと考えられる。

③本論では近代の歌人である五島美代子との比較研究がなされているが、俵万智をはじめとする同時代歌人との比較についてどのように考えているかという質問がなされた。応答においては、この点について草木氏が十分な知識と見解を持っていることが示されたが、本論文が栗木京子という特定の歌人の全貌を明らかにすることを目的とした研究であるため、今回は踏みこまなかったことが明らかになった。

上述した3点の指摘はいずれももっともなものではあるが、草木氏の論文はこれらを越えて十分な学術的価値が認められるという見解で一致した。いずれの指摘も、草木氏の研究が同時代への広がり、通史的な広がりと共に時的にも通時的にも展開可能な価値を秘めていることの証とも言えるからである。また、草木氏の将来的な研究への期待として、今後の「社会詠」についてどう考えているか、近代短歌史、および和歌史における社会詠の研究の構築という大きなテーマも提案された。

上記の1～4を踏まえ、慎重に審議した結果、審査員は、本論文が課程博士の学位を受けるに値する優れた論文であることを、全員の総意として確認した。

以上

公表予定

日程	令和 年 月 日
公表形態	① 掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	② 単著（発行者）
題目	<※タイトルを変更した場合>